

実践躬行

JISSEN KYU-KOU

突撃！
日本を元気にする
公認会計士へ

Engage in the Public Interest
社会に貢献する公認会計士

No.001 2015年6月1日発行

発行元：日本公認会計士協会
〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
http://www.jicpa.or.jp
編集：日本公認会計士準会員会 実践躬行チーム

じっせんきゅうこう【実践躬行】「理論や信条をそのとおりに自分自身で実際に行うこと。」(大辞林より)

Profile
No.1

公認会計士に於て最も良いたこは
生きた経済を常に勉強で生きたこと。
知識と知恵を習得し継続すること。
生きた証であり、唯一明日への希望をアタ
方法で。夢と希望を常に持ち続けること
他、日々の生活から学び続けること。

中尾 健



中尾 健

なかお たけし

早稲田大学商学部卒
公認会計士・税理士

KPMG 港監査法人(現有限責任あずさ監査
法人)を経て平成8年独立、パートナーズ・
コンサルティング・グループ各社設立

平成25年日本公認会計士協会常務理事就任

中尾先生が公認会計士になられた経緯について教えてください。

僕が早稲田の商学部に入った頃、日本は当時バブルで、就職に困るということはありませんでした。でも、このまま就職していいのかなという思いはありましたし、当時は海外に留学してMBAを取るみたいなのが一つ流れになっていたんです。そういうのもあり経営に関するコンサルタントをやりたいなというのを漠然と思っていました。

今の試験制度は若干違うかもしれませんが、当時はMBAの科目と会計士試験の科目がすごく重なっていて、しかも会計士の試験の方が遙かに深く勉強できるように思いました。

浮かれた時代だったように思いましたが、何か違和感を感じて、とりあえず公認会計士の資格取得を目指しました。合格後は監査法人には入るつもりはなかったのですが、周りに相談したら、せっかく二次試験受かったんだから三次試験受かるまではやったらと言われて、港監査法人(KPMG)に面接に行きました。

公認会計士人生の中でのターニングポイントについて教えてください。

あるときに社内で、英語のテストを全員受けろってなって、KPMGでさえ当時150人ぐらいいしかなかったんだけど、いざ受けたらかなりいい方だったんです。ご褒美でヨーロッパ研修に参加させてもらいました。そのヨーロッパ研修のイギリス人の講師が、最初の授業で、GDPとプロフェッショナルフィーの比率の一番高い国と一番低い国はどこだというのを最初に質問してきたんですよ。一番高い国はイギリスで、一番低い国はダントツ日本なんです。ということは、日本は会計後進国なんだとその時気づきました。自分は海外に行こうと思っていましたが、日本に残った方が活躍のチャンスがあるのではないかと、そう思いました。当時、確かに日本では公認会計士の数も少ないし、監査報酬も欧米のそれに比べてものすごく少ない。公認会計士という言葉も一般には知られてなくて、「計理士さん」なんて言われてました。それに橋本内閣で会計ビッグバンとか言っていて、日本でもこれから会計業界が伸びるんだなと思いました。その伸びを享受するのであれば、自分でやったほうが早いかなと思いました。それに年齢も丁度30歳ということでチャレンジするのなら若い方がいいのかなという思いもありました。

と、そう思いました。当時、確かに日本では公認会計士の数も少ないし、監査報酬も欧米のそれに比べてものすごく少ない。公認会計士という言葉も一般には知られてなくて、「計理士さん」なんて言われてました。それに橋本内閣で会計ビッグバンとか言っていて、日本でもこれから会計業界が伸びるんだなと思いました。その伸びを享受するのであれば、自分でやったほうが早いかなと思いました。それに年齢も丁度30歳ということでチャレンジするのなら若い方がいいのかなという思いもありました。

中尾先生は、仕事とプライベートの関係についてどのように考えていますか。

最近の人達、ライフワークバランスとかね、いろいろ言うけれど、ライフワークバランスっていうのは、人間の能力がね20代の時も50代の時も変わらないのであれば、どうぞやってくださいと心の中では思っています。明らかに若い時の方が馬力もあるし、吸収力もあるので、その時はね、もう死ぬほど働くというぐらいの意気込みでやるのが長い意味で効率的なのではないかと思えます。勿論体力的にハンディを負っている方もいらっしゃいますのでそんなことは強制はできません。

普段の業務に加えて、協会活動をされているのは、なぜでしょうか。

お世話になった人に声をかけてもらったというのが実態なのですが、日本の会計士の業界では、依然として監査業務が主流でしかも監査業務の9割を大手法人がやっています。そうすると、公認会計士になるということが、監査法人に対する就職試験の前哨戦みたいな感じになっているように感じます。以前に比べて見方を変えれば洗練されてきているということも言えると思うのですが、一方で資格が持っていたある意味野武士的な、そういった魅力が薄れているような気もしています。そういった雰囲気の中で、僕のようにある種の垂流みたいなのがいて、意見を言ってもいいのではないかと思ったのも事実です。

今後、公認会計士試験はどのようになっていく必要があるでしょうか。

結局、協会の仕事をしながら思いましたが、監査という仕事はコンプライアンス業務なので、中々そこにサービスオリジナリティを発揮するのは難しい仕事だと思います。今の業界全体の方向性とか、金融庁主導の規制が強くなっている弊害もあるかもしれませんが、方向性としては間違っていないで、やっぱり監査って投資家のためにやっていると、資本市場のためにやっているわけで、これは制度としては準公務員的な性格は常に残っていると思います。だから、最近の受験生に安定のために資格をとる人が多いというのはある意味では正常なことなのだと思います。僕も6年半という短い期間でしたが、監査をやったというのはものすごくプラスになっているので、それはすごくいい経験だと思います。ただ、その世の中のニーズというのは、やっぱりアドバイスだったり、コンサルティングだったりというニーズが非常に大きいので、やっぱりそちらの方の人材発掘も大切です。

これから業界を担う若手や受験生にメッセージをいただけますでしょうか。

会計を知っているか知っていないかで世の中の方は二分化されます。かつ、知らない人の方が圧倒的に多い。有名な国家資格を取ろうと思ったら医者とか弁護士とか会計士となると思いますが、会計士が圧倒的にいいのは、参入障壁が結構高いにも関わらず普遍性があることだと思います。例えば法律、弁

護士なんかの場合には、分野の中でもものすごく細分化されているので、法律の町医者のようなものというのは存在しにくい時代になっているように思えます。

プロフェッショナルとね、アマチュアの違いついてね、何かというと、プロフェッショナルというのはフレームワークが分かっているかどうかのだと理解しています。フレームワーク、物事の構造とかね、会計とは何なのかとか、本質的なところが分かっているかどうか、というのがこれプロの証明だと思います。そういった意味ではその会計士として勉強経験することは、ビジネスの世界をやっていくのであれば十分条件ではないけども、必要条件だと思っています。そういった意味ではまだまだ日本の会計リテラシーは低いので、会計を良く理解しているということはまだまだアドバンテージとしてはそれなりの価値はあります。あと最近、会計士の試験の人気下がっているようですがこれは明らかにチャンスだと思います。

